

修士論文（要旨）

2017 年 1 月

中学生における見捨てられ不安が親密性に与える影響
— 怒りと社会志向性の否定的側面が媒介するの —

指導 山口 一 教授

心理学研究科
臨床心理学専攻

215J4006

窪井 昌子

Master's Thesis (Abstract)

January 2017

The Influence of Abandonment Anxiety on Junior High School Students' Intimacy:
Is It Mediated by the Negative Aspects of Anger and Social Orientation?

Masako Kuboi

215J4006

Master's Program in Clinical Psychology

Graduate School of Psychology

J. F. Oberlin University

Thesis Supervisor: Hajime Yamaguchi

目次

I. 問題の背景と所在	1
II. 目的と意義	1
III. 方法と手順	1
IV. 結果	2
V. 考察	2
引用文献	I
資料	①

I. 問題の背景と所在

中学生は第二の分離固体化期である思春期にあたり、親から分離することによる見捨てられ不安を再体験する時期ではないだろうか。それと同時に心と体に急激な変化が訪れることによって、大人と子どもの狭間で揺れ動く思春期心性がある。見捨てられ不安が強まると、人との関わりは、同一性の喪失を引き起こすような脅威となり、呑み込まれる不安を感じ、親密な対人関係を持てなくなってしまうのである(大野, 1995)。近年、不登校やいじめなど、児童や生徒における問題はさらに深刻化している。その背景には多くの要因が絡み合っているが、その一つに対人関係が挙げられる。

Erikson (1959, 1968) のいうお互いの欲求を満足させ合うことができる、対人関係の相互性が大事であるといえる。他人たちと親密に本物のかわり合いを結ぶことは、確固たる自己確立の結果であると同時に自己確立の試練でもあると述べている。

Masterson (1972) によると、「見捨てられ不安」は分離個体化段階の乗り越えの失敗により生じているとされている。そしてこれは母親の未解決な見捨てられ不安が、子どもの正常な分離個体化の発達を阻害するとしている。

また、「見捨てられ不安」は一つの感情からではなく、6成分から成立し(Masterson, 1972)、その成分の一つである怒りと憤怒に焦点を当ててみると、思春期の心は敏感で傷つきやすいと同時に、それが怒りへと変化しやすい状況にある。怒りを攻撃的に表出したり、また逆に卑屈になり怒りを抑えてしまうことが思春期においては考えられる。

対人関係には、親密性と同時に社会志向性が関係していると考えられる。この社会志向性とは、伊藤(1993)によると、他者や社会との関係性に意識が向かい、他者との共存や社会適合を志向する傾向と定義される。特に、社会志向性の否定的側面である、未熟で一方的な依存や、自我の強さに裏づけされない他者への追従、自分を殺してまでの過剰適応などが対人関係に影響を与えている可能性がある。

以上のことから、中学生の見捨てられ不安が対人関係にとって重要な役割を果たす親密性に及ぼす影響が重要となると考えられる。

II 目的と意義

第二の分離個体化期と言われる思春期・青年期は見捨てられ不安が再体験される時期であり、「同一性対同一性拡散」という思春期心性が表れ、それが対人関係に影響を及ぼすと考えられる。本研究では、思春期にある中学生を対象として、「見捨てられ不安」が怒りや社会志向性の否定的側面を通じて親密性に影響を与えるかを検討することとした。中学生独特の心の状態を理解することで、不登校やいじめにつながる要因の究明の一助としたい。

III 方法と手順

首都圏の中学校に在籍する男女を対象とし、質問紙調査を実施した。桜美林大学研究倫理委員会の承認(2016年4月承認, 受付番号15049)後、2016年6月～9月の期間に調査を実施した。

質問紙は、フェイスシート、斎藤・吉森・守谷・吉田・小野(2012)が作成した「見捨てられ不安尺度」、大竹恵子、島井哲志、曾我祥子、宇津木成介、山崎勝之ら(2000)が作

成した「日本版 Müller Anger Coping Questionnaire」, 伊藤 (1995) が作成した「個人志向性・社会志向性 N 尺度 (社会志向性 N 因子)」, 谷・原田 (2011) が作成した「親密性尺度」の 4 尺度から構成されている。分析には SPSSver23.0 を使用し, 各尺度の因子分析, 尺度間の相関, 共分散構造分析を行った。

IV 結果

因子分析の結果, 「見捨てられ不安尺度」は 1 因子構造, 「日本版 Müller Anger Coping Questionnaire」は 4 因子構造, 「個人志向性・社会志向性 N 尺度 (社会志向性 N 因子)」は 1 因子構造, 「親密性尺度」は 1 因子構造が妥当とされた。

尺度間の相関は「見捨てられ不安」と「個人志向性・社会志向性 N 尺度 (社会志向性 N 因子)」との間に中程度の正の相関を示した。また, 「見捨てられ不安」と「親密性」, 「怒り抑制」, 「怒り罪悪感」にそれぞれ正の弱い相関を示した。「個人志向性・社会志向性 N 尺度 (社会志向性 N 因子)」と「親密性」の間に負の弱い相関を示した。怒りの因子間の相関は「怒りの抑制」と「怒り罪悪感」, 「怒りの表出」と「怒り罪悪感」, 「怒りの表出」と「怒りの主張」にそれぞれ正の弱い相関を示した。「怒り主張」と「怒り抑制」に負の弱い相関が示された。

パス解析の結果によると, 「見捨てられ不安」が親密性に負の影響を及ぼすことが分かった。また, 「見捨てられ不安」は「怒りの罪悪感」に正の影響を与え, それが「親密性」に正の影響を与えるという, 新たな知見が明らかとなった。そして, 「見捨てられ不安」が「親密性」に与える負の影響について, 直接的な効果と同程度の「社会志向性の否定的側面」が媒介して影響を与える効果があるということがわかった。

V 考察

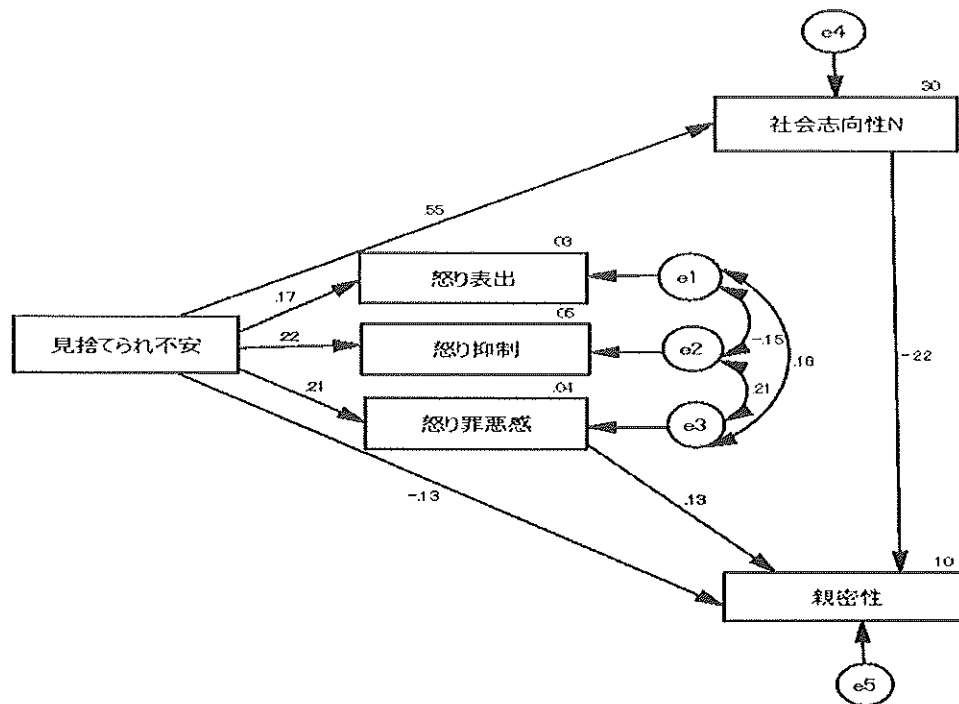
「見捨てられ不安」があると, 親密な関係にはなれないという結果を, 「見捨てられ不安」から起こる怒り表出に罪悪感を感じることで相殺するという結果は, 見捨てられたくない, 相手に去られたくないという第二の分離固体化期が招いた不安が, 罪悪感を駆り立て, 見捨てられないような対処を行い関係を修復するものと思われる。これは中学生だからこそ感じ得る思春期独特の傾向ではないかと考える。

社会志向性の否定的側面というのは, 社会の中での自己の位置付けが他者との間で調和が取れておらず, 他者を優先し自分を殺してしまう志向ということになる。中学生においては, まだ自己がしっかりと確立しておらず, 他者と自分との間で葛藤し, 相手に飲み込まれてしまう不安定な位置付けが見て取れる。「見捨てられ不安」が直接「親密性」に与える影響だけでなく, 中学生にとって大きな影響を与える社会志向性の否定的側面が媒介することによって「親密性」に影響を与えるということが立証されたと考えられた。本研究の結果から, 社会志向性の否定的側面につながるような認知の歪みを改善することによって, 友人関係が円滑になり, 学校への復帰の手助けになるのではないかと考える。また, 怒りを表出したことへの罪悪感が「親密性」に正の影響を与えていることに注目すると, 罪悪感を感じる人は内省力があるので, 内省力を良い方向に活かせるように援助することが対人関係の円滑化へとつながっていくと考える。

引用文献

- Erikson, E. H. (1959). *Identity and the life cycle*. New York: W.W.Norton & Company,
小此木啓吾 (訳編) (1993). 自我同一性 誠信書房.
- Erikson, E. H. (1968). *Identity : Youth and crisis*. New York: W.W.Norton & Company,
岩瀬庸理 (訳) (1993). アイデンティティ 金沢文庫.
- 伊藤美奈子 (1993). 「個人志向性・社会志向性に関する発達的研究」 教育心理学研究, 41,
293-301
- 伊藤美奈子 (1995). 「個人志向性・社会志向性 PN 尺度の作成とその検討」 心理臨床学研究,
13, 39-47
- Masterson, J. F. (1972). *Treatment of the borderline adolescent*. Wily—Interscience,
New York 成田義弘・笠原嘉 (訳) (1979). 青年期境界例の治療, 金剛出版.
- 大竹恵子, 島井哲志, 曾我祥子, 宇津木成介, 山崎勝之, 大芦 治, 坂井明子, 西 信雄,
松島由美子, 嶋田洋徳, 安藤明人 (2000). 「日本版 Müller Anger Coping
Questionnaire(MAQ)の作成と妥当性・信頼性の検討」 感情心理研究学, 第 7 巻 第 1 号
13-24
- 大野 久 (1995). 『青年期の自己意識と生き方』 落合良行・楠見孝 (編) 講座生涯発達心理学 4
自己への問い直し: 青年期 金子書房 89-123
- 斎藤富由起, 吉森丹衣子, 守谷賢二, 吉田梨乃, 小野淳 (2012). 「青年期における見捨てられ
不安尺度開発の試み その 1」 — 社会構造の変化を重視して — 千里金蘭大学紀要 9
13-20
- 谷冬彦, 原田新 (2011). 「新たな親密性尺度の作成」 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研
究紀要, 5 (1) : 1-7

資料



$\chi^2=4$, $df=5$, RMR .013, GFI .997, AGFI .987, RMSEA .000, AIC 35.984